「最初の弟子たち」（ヨハネによる福音書一章三五～四二節）

1　弟子たち

今日は、待降節（アドベント）第三主日です。今日も、ヨハネによる福音書によって洗礼者ヨハネを取り上げます。

洗礼者（バプテスマの）ヨハネとは、くり返し申し上げていますが、イエスの宣教活動の少し前に現れ、ヨルダン川の低地、荒れ野で、人々に、悔い改めの洗礼をおこない、センセーションを巻き起こした人物です。

聖書はこの洗礼者ヨハネを、イエスを証しし、紹介する人と理解し、イエスの宣教は、そこから始まったと見ています（使徒一・二一、二二）。

洗礼者ヨハネのことを、私ども、ここまで、二回取り上げました。はじめは一九～二八節でした。そこでは洗礼者ヨハネ自身が、自分はメシア（キリスト）ではない、メシアが現れるその準備をする、悔い改めの洗礼を授けることで、そうしているのだと言っていました。

次に二九～三四節、先週の箇所です。洗礼者ヨハネの証しの言葉から成り立っている箇所でしたが、こうした言葉の背景に、洗礼者ヨハネからイエスが洗礼をお受けになった出来事があると申し上げました。実際、この後、洗礼を受けたイエスは、ガリラヤに帰り、そこで、神の国は近づいた、悔い改めて福音を信じなさいと、宣教の第一声をあげたのです。

今日の三五節以下には、早速弟子たちが登場します。今日の箇所には、三人、アンデレと、その兄弟ペトロ、もう一人は、名前が出ていません。昔から、イエスの愛弟子（まなでし）ヨハネと言われています。

来週取り上げる四三節以下には、フィリポとナタナエルという二人の弟子が出てきます。ですから、今日の箇所から一章の終わりまで、五人の弟子が出てくることになります。

ここに出ているのは、もちろんまだ名前だけで、それがどうこういうのではありませんが、イエスが洗礼を受けガリラヤに戻り、宣教を開始したそのとき、イエスが最初にしたことが、弟子を招くということであったのです。このことは、ヨハネによる福音書でそうなっているというだけではありません。他の、ヨハネ福音書と趣を異にするマタイ、マルコ、ルカによる福音書も同じです。そこに私ども、御心の表れがあると見なければなりません。神の救いが進んで行く中にはっきりと表れ、見えている御心です。

何よりもはじめに弟子を招く、このことは、時々申し上げていますが、やはり重要なのです。そこにどんな意味があるのでしょうか。

イエスは孤独のうちに、孤立して宣教活動をおこなったのではないのです。いつもそこに弟子たちがいました。弟子たちと共に宣教なさった、弟子たちを宣教に与らせた、そうすることなしに宣教を始めなかった、それは決して何か、当たり前のことではないのです。

イエスの思いの中には、神の民イスラエルが、神の契約の民として、まことの信仰

の民として、世界の祝福の基としてつくり直されなければならないということがあったのです。その土台になるのが、弟子たち、一二人の使徒たちでした。

この弟子たちが、イエスの宣教の、いわばお手伝いをしつつ、神の民を刷新する人たちとして相応しい人材であったかというと、人間的な言い方をすれば、そうではなかったかも知れません。福音書を読み進めていけば、明らかになっていきます。それでも、主イエスは彼らを、そして私どもを、選んで（一五・一六）、見込んで、いわばパートナー（仲間）として、神の国を宣べ伝え、神の国を証しする群れ、教会をつくろうとなさったのです。そのイエスの強い思いが、願いが、宣教のはじめに弟子を招くことになって表れたのでした。

2　イエスに従った

イエスがその宣教のはじめに弟子を招いたということ、その意味は、いま申し上げた通りです。

しかし、ヨハネによる福音書に伝えられているのは、マタイ、マルコ、ルカ、この三つの福音書（一般に、共観福音書という）に伝えられているのと、その様子が随分違うことにお気づきのことと思います。

イエスの最初の弟子として、私どもが知っているのは、ペトロとアンデレ、それにヤコブとヨハネです。マルコによる福音書によれば（一・一六）、彼らはみなガリラヤ湖の漁師で、仕事中に「わたしについて来なさい」と声をかけられ、網を捨て、家族を後に残してついて行ってしまいます。それが、私どもの頭にある最初の弟子の召命の情景です。ところが、今日の箇所の最初のところは、こうなっています。

> その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。二人の弟子はそれを聞いてイエスに従った（三五～三七節）。

まず「二人」ですが、一人はアンデレ（四〇節）です。もう一人は名前が出ていません。先ほど申し上げた、イエスの愛弟子ヨハネです（一九・二六他）。名前が出ていないのは、じつはこの福音書の著者であるからです。ヨハネによる福音書の「ヨハネ」とはこのイエスの愛弟子ヨハネです。

ところでマタイ、マルコ、ルカのどの福音書にも出ていない、興味深い事実は、アンデレと愛弟子ヨハネがもともと洗礼者ヨハネの弟子であったことです。それが、洗礼者ヨハネの言葉「見よ、神の小羊」のひと言で、イエスに従っていく、つまりイエスの弟子になっているのです。

しかしこれはよく考えれば、これこそまさに洗礼者ヨハネの本来の役割そのものではなかったでしょうか。

というのも、洗礼者ヨハネは、証人として、自分の後から来られる方、自分はその履物のひもを解く資格もない、世の罪を取り除く神の小羊を指し示すために来たのだからです。

少し想像をめぐらせば、洗礼者ヨハネの周りに集まってきた大勢の人たち、そこに

は当然多くの若い人がいたはずです。実際、この時、イエスが三十歳とすれば（ルカ三・二三）、洗礼者ヨハネも三十歳、ないし三十一歳、愛弟子ヨハネは、十二弟子で一番若い、二十代の前半です。アンデレも――彼は二十代後半――ヨハネも、洗礼者ヨハネの悔い改めのメッセージに動かされたのです。こころ動かされる、揺さぶられるというようなことは、もちろん年齢には関わりのないこととはいえ、神を視野におきながら人生の意味を考える、自分の在り方を考える、世の中はこんなことでいいんだろうか、そう考えたのは、若いヨハネであり、アンデレであり、集まっていた同じような人たちでした。

そうした人々に、洗礼者ヨハネはイエスを指し示したのです。自分ではない、イエスのところへ、彼こそがメシア、神の子、世の罪を取り除く神の小羊、そこに道があり、真理があり、命がある（一四・六）と。

アンデレも、愛弟子ヨハネも、こうしてイエスに従ったのです。イエスもそれを受け入れられます。

> イエスは振り返り、彼らが従ってくるのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである（三八～三九節）。

先ほども申しましたが、マタイ、マルコ、ルカの弟子の召命の様子とは、全く違います。

ここのイエスと二人の弟子との会話は、ちょっと不思議な会話です。しかしはっきりしているのは、イエスが二人に声をかけられたことです。問うていることです。君たちは何を求めているのか、と。

アンデレもヨハネも、答えができていたようには、私には見えません。何を自分は求めているのだろう、分からなかった。それが、「どこに泊まっておられるのですか」という質問です。

弟子たちがイエスが同じ宿に泊まったというのは、聖書でほかにあまり思い出しませんが、ともかくイエスとのじっくりした語り合いの中で、二人が決定的な信仰と服従へと招かれたことは明らかです。

3　ペトロのこと

アンデレと愛弟子ヨハネのほかに、ここにペトロが出てきます。出てくるというより、この箇所の中心はペトロにあります。

しかし、ペトロとイエスの出会いは、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書とは異なります。ガリラヤ湖が出会いの場所です。

先ほど、アンデレと愛弟子ヨハネは、洗礼者ヨハネの弟子であって、それからイエスになったということを申し上げましたが、ペトロの場合は、そういうことは直接には書いてありません。しかしペトロも、洗礼者ヨハネも知っていたし、彼のところに

来ていたと思います。
ただこの時は、ここにはいなかったのでしょう。彼は一家を支えている立場の人間として、洗礼者ヨハネのもとにとどまりつづけていた弟のアンデレとは別の行動を取っていたようです。私どもまず、ペトロをイエスに紹介したアンデレについて目をとめたいと思います。

ヨハネの言葉を聞いた、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア――『油注がれた者』という意味――に出会った」と言った。そして、シモンをイエスのところに連れて行った（四〇～四二節）。

このアンデレの言葉や取った行動を見ると、いまここにいない、アンデレとは別行動を取っているペトロに真っ先に、イエスに出会ったことを伝えたいという思いが溢れています。ということは、ペトロも、洗礼者ヨハネが語る、彼の後に来る人に出会いたいと願っていたのです。
この後の福音書を見ると、アンデレは、とくに活躍した弟子ということはできませんが、このイエスのところ「に連れて行く」という点で、まことにすばらしい働きをしたと言わざるをえません。私どももなかなかこうしたことはできない。しかしここにまことに伝道や宣教の基本が示されているのだと思います。イエス「に」紹介すること、キリスト「に」紹介するということです。それは、執り成しの祈りのことでもあります。
さてイエスとペトロの出会いです。

イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ――『岩』という意味――と呼ぶことにする」と言われた（四二節）。

イエスは、ペトロ、すなわち、ヨハネの子シモンをじっと見つめて、お前を「ケファ」と呼ぶと宣せられます。ケファは、イエスと弟子たちが日常的に使っていたアラム語で「岩」の意味です。それをギリシア語に直して、新約聖書ではペトロとなります。意味は同じ、岩です。
イエスは彼を「岩」と呼んだ、しかし、どうして「岩」と呼んだのか、はっきり言って分かりません。
ただ聖書の中には、神によって別の名前が与えられた例は、いくつもあります。旧約のヤコブが、イスラエルという名を与えられたことは、少し前、私ども創世記を学びましたので、記憶に新しいところです（三二・二九）。
「岩」というのは、堅固さを示すのでしょうか。イエスがペトロの、あなたこそメシア、生ける神の子という告白を受けて、この岩の上に、すなわち、ペトロの告白の上に教会を建てると約束してくださったことはよく知られています（マタイ一六・一八）。その期待を示す、それは呼び名であったのかも知れません。いずれにせよ、そのようにして弟子たちは、神の救いの歴史に、キリストを証しするものとして用いられ、あずかっていくのです。

（一二月一一日）